

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

47年間封印の航空機事故、報告書公開

山本博之（京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授）



サバ州コタキナバルにあるダブル6記念碑（筆者提供）

2023 年 4 月、47 年間封印されていた航空機事故の報告書が公開された。1976 年 6 月 6 日、サバ州首相のフアド・ステファンらを乗せた G A F ノーマッド社の旅客機がラブアン島からサバ州本土に戻る途中でコタキナバル空港付近の海上に墜落し、操縦士と乗客を含む 11 人全員が死亡した。

サバ州の初代州首相として広く親しまれていたステファンをはじめ、サバ州の各コミュニティを代表する若い州閣僚たちが一度に亡くなったことで、サバ州の人々に大きな驚きと悲しみを与えた。

マレーシア政府はオーストラリアと合同の調査委員会を組織したが、積み荷の重量オーバーによる事故であるとだけ発表して、報告書は非公開とされたため、事故の原因についてさまざまな臆測を生んだ。

高名な霊媒師が事故の犠牲者の霊を招き、飛行機にしかけられていた爆弾が爆発したと話したこともあって、事故は何ものかによる陰謀だといううわさが流れた。霊の証言を信じた人はそれほど多くはなかったかもしれないが、陰謀説を否定しきれない背景があった。

当時、サバ州沖の石油開発を巡って国営石油ペトロナスとサバ州政府の間で条件の折り合いがつかず、交渉が行き詰まっていた。2 カ月前に州首相に返り咲いたステファンは、サバ州の初代州首相として州の権利を連邦政府に強く主張し、連邦政府の介入で州首相を解任されていた経緯があり、連邦政府とペトロナスにとって一筋縄でいかない交渉相手だった。

ステファンは、連邦政府の財務相でペトロナス社長でもあるラザレイ・ハムザとラブアン島で会って石油開発について協議したが、条件の折り合いがつかず、次の予定地であるコタキナバルに向かう飛行機の中で条件調整を続けることになった。

ただし、サバ州副首相のハリス・サレーの提案で、ハリスとラザレイは別の便でコタキナバルに向かった。ステファンの事故死を受けて州首相に就任したハリスの最初の仕事は、ラザレイと石油開発の書類に調印することだった。サバ州の取り分は 5 % とされ、今日に至るまで連邦・州関係の筆頭の課題となっている。また、その条件で調印したハリスは連邦政府と裏で手を結んでいたのではないかと噂された。

今回公開された報告書によれば、気象条件が事故に影響を与えた可能性はなかったし、機体に爆発や火災の痕跡もなかった。積み荷は制限重量以下だったが、積み方の問題で機体の重心が後方の限界点より大きく後ろにあり、着陸のために旋回したときに機体のコントロールを失ってコタキナバル空港付近の海上に墜落し、水深 2 フィートの海底に衝突した。

また、操縦士は飛行経験が浅く、前夜の食事のために体調不良を訴えていたことに加え、当日は操縦士の規定の勤務時間を超過して疲労していた。報告書に重要な新事実は見当たらず、なぜこれまで非公開だったのか不思議に感じられた。

墜落現場である海上には 6 月 6 日にちなんだダブル 6 記念碑が建てられた。コタキナバルの開発により埋め立てが進み、現在は住宅地に囲まれた静かな公園になっている。毎年 6 月 6 日には遺族や関係者が訪れて追悼式を行っている。

ステファンの妻ラヒマは、まだ元気だったころ、追悼式に参列して他の犠牲者たちの遺族と一緒に大泣きして、しばらくするとからっとした顔になって、「さあ飲みに行こう」と参列者たちを誘って午後のティーに出かけて行ったものだった。ラヒマは夫の死の原因が何だったのかを知りたいと報告書の公開を訴え続けていたが、報告書が公開される 1 年前の 2022 年 3 月に亡くなり、報告書の公開の報せを聞くことはなかった。

< 筆者紹介 >

1966 年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。マレーシア・サバ大学講師などを経て現職。専門はマレーシア地域研究。研究関心はサバ州・サラワク州の社会史、ジャウィ（アラビア文字表記マレー語）の社会的役割、災害復興時の社会再編、演劇・映画と物語文化圏など。編著書に『マレーシア映画の母 ヤスミン・アフマドの世界』（英明企画編集、2019 年 7 月）がある。日本マレーシア学会（JAMS）理事。